

## 会員研究

# 大伯皇女とひたすらに 神に仕えて

遠田千代吉

### 一 はじめに

歴史上の一連の事象の背景には、「すべては此処から始まる」と言える起点がある。今、こゝで論述しようとしている大伯皇女の齋王就任の歴史上の起点は、大海人皇子の立ち向かう壬申の乱の途上にあつた。大海人皇子は勝敗の行く末が見えず、不安感にさいなまれるなかで、伊勢神に戦勝祈願を行った。『日本書紀』（以下書紀）は述べる。

「天武元年（六七二）六月二六日 且（あした）に朝明郡の迹太川（とほかわ）の辺にして、天照太神を望（たよせに）拜（おが）みたまふ。」

朝明郡は伊勢の北部に位置し、遠く離れるが、遙かに伊勢神宮を望み、一心に戦勝を祈願し、先の見えぬなか、皇子に同行する一行の戦意を鼓舞したのである。後、大海人皇子は壬申の乱

に勝利したが、途上の、この経緯からすれば壬申の乱の勝利後、伊勢神宮の加護に感謝し、神宮重視策が採られることも必然と理解できる。

### 二 齋王への選任

#### （一）大伯皇女の齋王選任

大海人皇子は天武二年（六七三）二月二七日、飛鳥浄御原に天武天皇として即位した。即位するや、二か月後には伊勢神宮に奉仕する齋王として大伯皇女を選任した。『書紀』は伝える。

「天武二年四月一四日 大来皇女を天照太神宮に遣侍（たてま）だ）さむとして、泊瀬齋宮に居（はべ）らしむ。是は先ず身を潔めて、稍（やや）に神に近づく所なり。」

（二）大伯皇女の齋王選任への理由

「ここでは「何故大伯皇女が齋王に選ばれたか」について考えたい。選任基準として一般にいわれる未婚の皇女としての条件に加え、次の視点に注目しておきたい。

① 齋王の重要性と大伯皇女の高貴性 天皇の祖神を祀る伊勢神宮は、王権の守護神であり、天武天皇にとって国土統治上も極めて重要な存在である。そのため自己の身代わりとして伊勢神に仕える齋王は、天皇に身近な高位な人物を当てる必要がある。その意味から天皇と天智皇女である大田皇女との間に生まれた大伯皇女は、「高貴性」の面から適格とされた。

② 大伯皇女の成人到達 天武二年（六七三）のこの年、大伯皇女は十三歳となり、古代の女性として成人に達した。天皇の身代わりとして祭祀を行う上で、成人到達は大きな要素として考えられたのではなからうか。一方、天武皇女のなかで、大伯皇女は第二子であると思われる、長女は額田王との間の十市皇女である。同皇女は、この段階で既に大友皇子妃となっており、ま

た他の皇女は成人に達していないと思われる。

結果として天武天皇の選任段階においては、候補は大伯皇女一人となるが、天皇としては満を持しての選任であつたらう。また、まさにこの時、皇女が成人に達したときには運命の巡り合わせを感じざるを得ない。

#### （三）泊瀬齋宮

大伯皇女は一年半の間、泊瀬齋宮で身を清める潔斎の生活をおくることとなる。泊瀬齋宮はどこに位置しているのであろうか。

#### ① 脇本遺跡

奈良県桜井市の脇本遺跡は初瀬谷にある。遺跡には雄略天皇の宮跡も含まれているとされ、橿原考古学研究所を中心に二一次にわたる調査が行われている。このなかで平成二三年の第一七次調査では、七世紀後半の南北三間・東西八間の掘立柱建物の柱穴跡を検出し、大伯皇女の「泊瀬齋宮」の可能性（一）が指摘されている。初瀬川も近く、右岸の河岸段丘上にあり、禊の場としての泊瀬齋宮の可能性が高いと思われる。

## ② 地元伝わる伝説

桜井市上之郷小夫（おぶ）は、長谷寺の門前を過ぎた谷奥に入る山村である。この村にある小夫天神社（てんじんしゃ）は、地元では倭姫命と大伯皇女の潔斎の地（一一）と伝えられてきた。天神社の背後の山は「齋宮山」と呼ばれ、近くの修理枝（しれだ）の地には化粧川が流れ、倭姫命と大伯皇女が禊をしたと伝えられる。「化粧淵（別名・化粧壺）」がある。平成三一年二月近鉄長谷駅よりタクシーを利用し、化粧淵を訪れた。小夫は山の上の集落であり、修理枝の畑を下る廃田の草々に隠れ、化粧淵はあった。茶色に染まる泥岩の上を細流が流れ落ちている。現状では高低差一メートルに満たぬ滝の前の「しめ縄」が、化粧淵は此処と教えている。これから脇本遺跡が泊瀬齋宮と立証されれば、小夫のゆかしい伝説は伝説に止まる。

## （四）伊勢へ

泊瀬齋宮で一年半にわたる潔斎を終えた大伯皇女は、いよいよ伊勢神宮に向かうこととなる。『書紀』は云う。

「天武三年（六七四）一〇月九日 大来皇女、泊瀬の齋宮より、伊勢神宮に向（まう）でたまふ。」この段階では、『書紀』において向かう先として、齋宮の名は出てきていないことは銘記しておく必要がある。

## 三 飛鳥時代の齋宮

先ず、ここでは「七世紀後半の伊勢神宮」、「齋宮の所在地」、「齋宮制度確立への変遷」についての認識を確認してから論を進めたい。

## （一）七世紀後半の伊勢神宮

伊勢神宮は日本の心のふるさとである。今は人々誰もが日々の安穩を求めて参拝する。しかしながら古代の伊勢神宮は、今と様相を異にする。直木孝次郎氏によれば、伊勢神宮は六〜七世紀の間に伊勢地方神から天皇家の氏神すなわち皇祖神の社に転換（三）していった。従って、この時代の伊勢神宮は天皇家・天皇の私的な氏神であり、「天皇の守護神」として王権を祭祀面から支える役割を持っていた。この意味から一般民衆の信仰とは隔絶した性格のものであり、

伊勢神宮への祈願は天皇のみに許され、皇親を含め私的な祈願・幣帛奉呈は禁断（四）されていた。つまり伊勢神宮の「私幣禁断の制」が厳然として存在した。

## （二）齋宮の所在地

齋宮跡は三重県多気郡明和町にある。同遺跡は伊勢市と松阪市のほぼ中間、周辺に畑地、水田が広がる帯にある広大な遺跡である。（東西二km・南北〇・七km・面積一四〇畝）

低位段丘上に位置し、近くには齋王が禊を行った櫛田川の古流といわれる祓川が流れる。

ここで注目したいのは、伊勢神宮から約一五km離れていることである。何故齋宮は、神宮から離れた地に置かれたのであろうか。

① 屯倉の転用 平安初期に編纂された『皇太神宮儀式帳』によれば孝徳朝・大化五年（六四九）の国郡（評）制の施行に伴って度会・多気の二郡（評）が神郡として立てられた。また、この時多気郡の十郷を以て屯倉が設置されたと記録されている。王権の直接の管轄下に

あったこの屯倉が、齋宮を設置するに際して用地として転用された可能性が高いと思われる。

② 神宮との距離の間の必要性 皇祖神を祀る神宮にあまりに近接して齋宮は設置できなかったのではなからうか。さらには神宮地域を支配する豪族渡会氏との関係の配慮もあり、離れた地に設置したか、いずれにする神宮と齋宮との間に距離の間の必要性が厳然としてあったと思われる。このことは後（のち）に、神宮により近く設置した宮川河畔の齋宮離宮院（度会郡小俣町）も神宮から約八km離して設置しており、この「間合いをとる」考えは守られている。

これらのことを背景に多気郡に齋宮が設置されたと思う。齋宮歴史博物館の行った齋宮跡の発掘調査では、七世紀後半から八世紀初めの飛鳥時代に建てられた宮殿の一部とみられる建物遺構（五）が見つかっている。このことから大伯皇女も当地で居住し、齋王としての務めを果たしていたと思われる。

（三） 齋宮の制度確立への変遷

齋宮（齋王）制度は当初より組織的に確立されていた訳ではない。齋宮制度が組織的・律令的・行政的に整備されてきたのは、文武朝〜聖武朝以降である。この意味から大伯皇女の時代には「齋宮・齋王」との呼称もなく、皇女は天皇の神宮に対する私的祭祀の分与がなされた者としての派遣であり、齋宮制度の原初的形態として過渡期にあったことは十分認識しておく必要がある。また、派遣された皇女を支える官の機構も、未だ小規模な天皇の家政的機関としてのものであった。

#### 四 齋王の日々

大伯皇女は潔斎の後、伊勢・多気郡の齋宮に着任した。齋王は天皇に代わって、ひたすら皇祖天照太神を奉斎する「大御神の御杖代（みつえしろ）」とも称され、太神の杖代わりとしての奉仕が務めとされていた。齋王は具体的にどのような祭祀を行い、日々の務めを果たしていたのであるか。奈良時代以前には具体的な記録がないが、『延喜齋宮式』に定める事柄も参考に、

大伯皇女の「齋宮における日々の姿」を追ってみた。

#### （一）齋王の日常

齋王は常に神と接する者でありながら、神を迎える者であった。かつて天皇の「御体御占（ごたいのみうら）」と称する占いがあった。大御孫（おおみま）、つまり天孫の子孫の肉体に顕れた徴候を調べる占いであり、その兆候は神のお告げ、つまりインフォメーションと理解された。齋王は、齋宮において、これと同じ立場に立ち、天照太神の意向を、その体で体現する・感じ取る者であり続けなければならなかった。まさに「天照太神のセンサー」の役割（「六」）をもっていた。静かに座る部屋の中でも、流れる風の動き、揺れる障子の動きをも敏感に感じる緊張の状況下にあったと思われる。侍女にかしずかれ、ゆったりと時間の流れに身を任せる日々の生活ではなかったのである。

#### （二）齋王の祭祀行事

①神宮での三節祭  
天皇の守護神・天照太神を祀る神宮の祭祀は、宮中の王権祭祀と同じ形で行われるのが原則

である。神宮祭祀においては、九月・神嘗祭（かんなめさい）、六月・一二月・月次祭（つきなみさい）が「三節祭」といい、最も重要な神事であった。神嘗祭は新穀の大御饌を奉る神事であり、月次祭は年に二度行われ、齋み清めた大御饌を深夜に二回奉る神事である。ここでは神嘗祭の際の齋王の祭祀を具体的に見てみよう。

#### ○九月 神嘗祭

前月末 齋宮近くの海・尾野湊（大淀）で禊

一五日 移動し、齋宮離

宮に入る。大殿祭（おおとのほが）の後、神とともに夕、朝二回食事する。

一六日 外宮・玉垣門に

入り、拝礼、太玉串奉る。離宮に戻る。

一七日 内宮・玉垣門に

入り、拝礼、太玉串奉る。離宮に戻る。

一八日 齋宮に戻る。

ここに見るように、齋宮から神宮に移動して祭祀を行い、神宮では、齋王は内宮・外宮の内奥に入らず外側で、天皇の代理として神宮に拝礼を行った。また、

三節祭に準ずるものとして、神に御衣を奉る神衣祭（かんみそのまつり）も四、九月に行われていた。

#### ②齋宮での祭祀

齋宮での例月の祭祀としては、次のような祭祀が定例的に行われていた。

○「忌火祭（いみびのまつり）・庭火祭（にわびのまつり）」月のはじめに行われ、「火」を神聖視した祭り。

○「卜庭祭（うらにわのまつり）」晦日に行われ、齋王の体に関わる占いに必要な祭り。

○その他「解除（はらえ）」、齋宮の清浄を保つ「道饗祭（みちあえのまつり）」

また、元旦の神宮通拝祭祀、宮廷と同時の新嘗祭、大晦日の大祓等の年間行事も行われていた。まさに齋王の日々は、祭祀に身を奉げる日々であったと思われるのである。

#### （三）齋王の研鑽

ここでは特に大伯皇女が齋王としての生活の中で、勉めたとと思われる研鑽について述べておきたい。大伯皇女は、『万葉集』の弟大津皇子を想う哀切の歌・六